

不連続、あるいは断片の輝き

本田和子

◆ ◆ ◆
子どもたちの言動は、前後の脈絡もなく変貌するその不思議なりズムで、私どもを混乱させ、当惑させることがある。例えば、次のように。

——私の前を通り過ぎようとした子どもが、手に持っていた積木を一つ、ヒョイと渡してくれる。

「ありがとう」と私。

その子はニコッと笑って、「あのね、右の左の、中の奥です」と、はずんだ声で言う。

とまどっている私にも一つ、積木を渡すと、

「ミルクです」「右の左の上です。」

私は、笑ってうなずいて見せるしか、すべがない。——「一体、彼らは、何をしているのだろうか？」こんなとき、私どもに生じる極めて平均的な反応は、こうした軽い当惑と訝りであろう。「積木のミルクと、右、左という方向指示は、どんな関係にあるのだろうか？」

彼らは、いきいきと声はずませて、疑いもなく楽しげである。従って、彼らにとっては、何かしら、意味のある行為に相違ない。とすれば……。そこで、私どもは、常識的な大人の常として、何かしら前後に脈絡をつけ、因果関係を見出そうと躍起になる。例えば、「積木をミルクと言ったのは、牛乳のカートンに見たたのであろう。『右、左』という方向指示は、先日の遠足で、先生が牛乳の空き容器を捨てさせようと、方向を指示されたのを真似したのであろう」などと……。

これが、私どもの、一般的な「理解」のレヴェルではないだろうか。つまり、私どもは、事象を「物語」として、つまり、因果関係的に一貫性を持った意味のまとま

りにおいて把握することに、余りにも慣れ過ぎていたのだ。と言うより、それ以外には、事象を受けとめるすべを知らず、それ以外には、意味が見出せないのである。

見知らぬ人にキャベツを一つ、渡す。そして、「難民救済のために、キャベツを売っていますが一寸の間、

預っておいて下さい」と言えば、かなりの人が預ってくれる。然し、「これは普通のキャベツです。何の意味も

ありません。預って下さい」と言うなら、ほぼ断られるであろう。¹これは、まさに、私どもの常識的な感覚が、

物語性のないものに恐れを感じ、通俗的な因果律が解体されることに強い不安を抱えていることの証ではない

か。因果関係のはっきりした殺人よりも、通り魔に対して厳しく反撥するのも、同様の理由によるものとされている。²

それゆえに、私どもは、子どもたちのきれぎれの言動

にも、何かしら前後の脈絡を見出し、辛うじて辻褄を合わせて、自身を納得させようとするのだろう。その結

果、私どもは、不連続の面白さに、さらには断片の放つ

あの輝きに、盲目である場合が多い。一つ々々、あんなにもキラ／＼と、子どもらの現在を輝かせているのに……。



子どもたちは、彼らが全身的に表明するその肉体の言語において、通俗的なまとまりを拒否し、因果律によって整除された物語的意味の世界に亀裂を生じさせている。そして、それは、伝達可能なものだけを価値とする日常的秩序に対して、鮮烈な挑発としても位置づくのだ。

私は、ここに、現代の知性の動きとパラレルな、一つの方向を見るように思う。アヴァン・ギャルドの芸術運動が様々に試行し、また、学問の世界でも先端的な知性たちが模索を続けている方向。つまり、肥大化し、硬直化した因果論的合理主義を問い直し、可変性、非連続性を含んだ神話的、宇宙論的世界を、人間に取り戻そうとする動きである。

前衛演劇運動の旗手の一人で、異能の演出家として世界の注目を浴びる鈴木忠志は、「伝達可能なものだけを大切にした結果、無限に規格化し類型化した思考や感じ方から洩れてくるものだけ」³に、人間的な可能性を見出し、体制的な秩序に束縛されない「己れ特有の形や言葉を持ちたい」⁴と願って、衝撃的な舞台を世に贈った。彼は、その舞台で、言葉をコミュニケーションの道具としてのみ機能させる、つまり、意味を伝えるためだけに用いる近代劇の理念をくつがえし、意味以外のレヴェルを回復させようと試みる。従って、俳優の科白に、いかに懸命に耳を傾けていても、語られたことの意味は一貫したものとしては把握されず、ストーリーの要約も不能であった。俳優たちの言葉は、そして動きもまた、私どもの常識的な感覚からすれば、極めて不連続に発しられたのである。

それらは、「物語」を拒否し、「言葉を意味のレヴェルだけでとらえること」を拒否し、そのゆえの「全体」を破壊しようとする昏い意志に溢れていた。しかも、それ

でいて、その舞台は、単なる否定と破壊に終始せず、明らかにかに、人間の新しい言葉や形の出現に手を貸していた。伝達可能なもの、合理的、日常的なものを拒否したことで、既存の言葉や形によっては伝わり得なかった世界が、俳優の肉体によって深層から立ち現われ、不連続で断片的に見える言葉や形が、新たな輝きを放ってみずみずと呼吸づいていたのである。それは、「破壊が同時に論理的にも感性的にも再生であり得るような仕事」⁵であり、「伝達不可能なもの、不可視なものへの探究にはじまり、その実現にいたる」⁶営みであった。

新しい演劇運動とそれをめぐるこの言説、これらの中に、私は、子どもの世界との著しい類同性を見る。子どもたちは、絶えず、「物語」を拒否し、「伝達」を拒み、「全体」を破壊する。ただし、彼らの場合は、「昏い意志」と言うよりも、「あわあわと新鮮な情熱」とでも言いたくなるのだが……。

然し、鈴木忠志が、既に築き上げられた秩序の中に「後から放り出された個人」⁷として、「自分なりの形や言

葉にならない感じ方^{*8}」を拒み、結果として既成の諸概念にメスをつきつけたとすれば、そして、それを「昏い意志」と把握するならば、子どもたちの「新鮮な情熱」もまた、「昏い意志」に裏打ちされていると言うべきであろうか。言うまでもなく、子どもらこそ「後から放り出された個人」であり、「自分なりの形や言葉にならない感じ方」に悩まされつゝ、「己れ特有の形や言葉を持ちたいと願う」存在に他ならないのだから……。



——三歳児の級。一人の子どもが泣き出す。寄ってき
た子どもたちは、「どうしたの?」とは問わない。

涙を拭いてやり、頭を撫でてやる。なかには、しっかりと閉じられたまま、大粒の涙を溢れさせている泣く子の両眼を、ギョッとおさえつけて、涙を止めてやろうとする子どももいる。

こんなとき、「どうしたの?」「何があったの?」という大人の問いかけは、子どもらの所まで届かない。そし

て、なきがらと化した言葉は、空しく地に落ちる。——
子どもたちは、原因を探るといふ形で過去へ視線を逸らさず、それとの関連で処置を考えようという一貫性をも拒否して、ただ、「泣いている現在」に、ひたと向き合う。とにかく、この友人は、現在、この場所で、「泣く」というありようで己れを語っているのではないか。

このとき、彼らの間では、「現在」という断片が、キラ／＼と光を放っている。そして、泣いている子どもは、泣くことのさながらにおいて、しっかりと受け止められる。考えてみれば、「無前提、無条件に、他者を受容する」というこのありようは、人間にとって一つの理想ではないか。断片と向き合い得る子どもらの世界では、その理想が、瞬時の花を開かせるのである。

* 1、2 寺山修司、「山口昌男の対談」「劇の出現」「現代思想」
一九八一年一〇月号所収

* 5、6 渡辺保「俳優の運命」講談社、一九八一年

* 3、4、7、8 鈴木忠志「内角の和」而立書房、一九八〇年